

看護技術習得過程における「段取りシート」活用の意味

— 学生の技術演習前・後の段取りシート記入に関する意識調査を通して —

A Meaning of Utilize of “an Arrangements Sheet” in Process to Learn the Nursing Technique

— Through the Study of Attitude about Filling out Arrangements Sheets
to Before and After Technical Practice of Students —

富 田 幸 江
Sachie TOMITA

佐々木 美 樹
Miki SASAKI

要旨

看護技術教育において、学生が技術を習得する際、手順を中心に技術を習得することを優先してしまえば、技術習得過程において、学生の主体性、問題解決力、想像力を生かす機会を逸する結果となり、患者への個別を考慮した看護技術を習得できないと考える。

そこで、基礎看護技術教育において、手順に終始することなく、手順を基本にイメージしながらも、対象の状況をどう判断し、安全で安楽な技術をどのようにしたら提供できるのかが重要といえる。このことから、このような視点を大切に、技術を身につけていくための方法として、全体を通して見る予測力、すなわち「段取り力」が身につく、一つのツールである「段取りシート」の活用を洗髪技術習得過程において試みた。

その結果、「段取りシート」の活用から、学生が看護技術習得のプロセスをどう捉えたのか意識調査により分析したことにより、以下のことが明らかになった。

1. 段取りシート記入により、技術の流れやポイントが整理できたと92.9%の学生が捉えていた。
2. 段取りシート記入は、技術の練習に活かされたと83.3%の学生が捉えていた。
3. 洗髪演習前後の段取りシートの違いを感じた学生は92.8%であった。その違いについては、「洗髪技術に関する気づき」と「段取りシートに関する気づき」の2カテゴリに分類できた。さらに、「洗髪技術に関する気づき」(60.7%)の内容をみると、洗髪技術に対する根拠やポイントへの気づき(46%)、技術を実施する上で、安全・安楽を考慮し、患者の立場に立って技術を提供することなど(14.7%)、看護を科学的に実践するための重要な気づきがみられた。「段取りシート記入に関する意見」(39.3%)では、段取りシートの書き方に関するものがもっとも多く(28.1%)、つぎに、段取りシートは看護技術の練習に役に立った(5.6%)、段取りシートの記入の大変さ(5.6%)などであった。
4. 段取りシートの違いをあまり感じないと回答した学生も少数であるがみられた。

キーワード 基礎看護技術教育 基礎看護技術の習得 段取り力 段取りシート

I. はじめに

看護教育に求められているものは、看護の専門職者として、自ら思考し、主体的に対応、判断、実践できる能力を持った看護職の育成である。なかでも、看護師の看護技術の習得は、対象の個別に対応した看護技術が提供できるものでなければならない。手順やマニュアル通りでは、個別に対応した技術提供はできない。そして、そのことが、看護を展開する上で、対象の看護の質をも左右させてしまう重要なものといえる。このことから、看護基礎教育における技術教育は、看護を展開できるための教育がなされなければならない。このため、看護技術の習得は学生にとって重要な教育内容であり、関心を持って主体的に学んでいかなければならないものとする。しかしながら、従来、実施されてきた看護技術教育は、「その技術に必要な知識を講義あるいは視聴

覚教材により与え、チェックポイントを提示しながら、教師がデモンストレーションをした後に、学生が手順通り行うという方法を多く用いていた。このような方法を優先することは、学生の主体性、問題解決力、想像力を生かす機会を逸する結果となり、目指す方法とは逆に学生の可能性を阻んでいることになる¹⁹⁾と河合は指摘している。このように、学生は教員が示した技術を手順どおりに覚えている状況では、河合の言う、学生の主体性、問題解決力、想像力を生かす機会を逸する結果となってしまうと考える。しかし、斉藤は、技術を習得する上で「イメージトレーニングとして、技術を実施する前に、頭の中で、こうなったら、こうなるというような、手順を組み立てておくことも重要である。また、それが、全体を通して見る予測力、すなわち「段取り力」が身につく上で大切である²⁰⁾と示唆している。

そこで、基礎看護技術教育において、手順に終始することなく、手順をイメージできながらも、自分はどういう角度で、対象の状況をどう判断し、安全で安楽な技術をどのようにしたら提供できるのか。そして、その様な視点を持って、技術を身につけていくための方法として、斉藤²¹⁾が提案した、段取り力を高めるための一つのツールである「段取りシート」の活用を洗髪技術習得過程において試みた。

今回、その段取りシートの活用を学生はどう捉えたのか、質問紙調査により明らかにしたので報告したいと考える。

II. 研究目的

洗髪技術演習前・後に学生が記入した段取りシートから、学生がそれらをどう捉えたのか質問紙調査により分析し、洗髪の看護技術習得過程における「段取りシート」活用の意味を明らかにする。

III. 本研究に関する用語解と洗髪技術演習に関する授業形態

1. 用語の定義

1) 段取り力とは²²⁾

全体を通して見る予測力であり、今何のために、これをやっているかが明らかになっている状態。さらに、物事を見るとき、「段取りを見る」という視点を導入すれば、見えてくるものがたくさんある。それが経験知となって積み重なってくる。経験知は視点がクリアであるので、あたかも整理された箱のように、たくさんの経験が積み重なっていくことができる。その視点で、いいものをたくさんみると、自分への取り込みが早くなる。段取りを組むためには経験知が積み重なっていかなければならない。経験知はどうやったら積み重ねることができるのかといえ、物事を見るときに、「段取り力」という視点を入れることによって得られる。

2) 段取りシートとは

段取り力を高める一つの方法として、すなわち、物事を進めるとき、どういう角度で、どのような方法で、何に向かうのか、その視点で、その流れを書き示していくための用紙（A4サイズ白紙）である。このシートは、齊藤⁹⁾が作成した「デザインシート」の一部を改編し、研究者らが「段取りシート」とした。

今回、その用紙に、学生が、教員の実施した洗髪技術のデモンストレーション（以下洗髪技術演習前）に、重要と考えられた手順などの流れやそのポイントを記載した。また、洗髪技術チェック後（以下洗髪技術演習後）にも同じ要領で段取りシートを記入した。

2. 洗髪技術演習に関する授業形態

1) 授業科目名：基礎看護技術Ⅱ(60時間)、うち、清潔援助に関するもの24時間（講義8時間、演習16時間：（うち、洗髪技術5時間実施）

2) 洗髪技術に関する授業内容

洗髪技術に関する授業時間は全8時間であり、その内、講義3時間、ケリーパッドによる洗髪技術のデモンストレーション1時間を実施した。その後、時間外に、学生同士が患者役、看護師役になり、自己練習をしたのちに、洗髪技術の習得状況を確認するため、教員が洗髪技術のチェック（4時間）を実施した。

洗髪技術のデモンストレーションの見学時に記入した段取りシートは、洗髪技術練習に活用した。

IV. 研究方法

1. 対象

看護系短期大学（3年課程）1年生 42名（女性40名、男性2名）

2. 時期：2004年11月

3. 調査方法及び調査内容

洗髪技術演習前・後に、学生により、段取りシートを記入した。

本研究では、洗髪技術演習後に段取りシートを記入した後に、以下の内容で、質問紙調査を実施した。

調査内容 1) 洗髪技術の流れやポイントの整理について、「十分できた」「できた」「ややできた」「あまりできなかった」「できなかった」「まったくできなかった」の6段階評定尺度により回答を求めた。

調査内容2) 洗髪技術デモンストレーション時(以下技術演習前)に記入した段取りシートは、技術練習に活かされたか。「十分役立った」「役立った」「やや役立った」「あまり役立たなかった」「役立たなかった」「まったく役に立たなかった」の6段階評定尺度により回答を求めた。

調査内容3) 洗髪技術演習前・後に、記入した段取りシートを比較して、違いを感じたか。「十分感じた」「感じた」「やや感じた」「あまり感じない」「感じない」「全く感じない」の6段階評定尺度により回答を求め、さらに、どのような違いを感じたのか、回答別に、その理由を自由記述式により求めた。

4. 分析方法

1) 調査内容1) から3) において、6段階評定尺度で回答を求めたものは、単純集計を実施した。

2) 調査内容3) において、自由記述式により回答を求めたものは、内容分析を実施した。なお、記述内容のカード化のルールは、1意味1内容とした。カード化したものについて、類似内容を分類し、サブカテゴリ化を実施し、さらに抽象度を高めるために、カテゴリ化を実施した。分析の妥当性を図るために、研究者2名がその内容について、十分検討を重ね、カード化と分類を実施した。

5. 倫理的配慮

質問紙調査の実施にあたっては、学生個々に研究の主旨と学生の記述内容から、個人が特定されないこと、さらに、研究目的以外の使用はしない旨を口頭で説明したのち、同意の得られた学生を研究対象とした。

V. 結果

調査内容1) の結果は、図1の通りであった。段取りシートを記入したことで、洗髪技術の流れやポイントを整理することができたと回答した学生は、「十分できた」「できた」を含めると、39名(92.9%)であった。「ややできた」と回答した者は3名であり、「あまりできなかった」「できなかった」「まったくできなかった」という回答はみられなかった。

次に、調査内容2) の結果は図2の通りであった。技術演習前に記入した段取りシートは技術練習に活かされたかという質問に対して、「十分役立った」「役立った」を含めると35名(83.3%)であった。「やや役立った」と回答した者は6名(14.3%)であり、「あまり役立たなかった」1名(2.4%)、「役立たなかった」「まったく役に立たなかった」という回答はみられなかった。

調査内容3) における6段階評定尺度で求めた回答結果は図3の通りであった。技術演習前・後に記入した段取りシートに違いについて、「十分感じた」「感じた」と回答した者は、24名

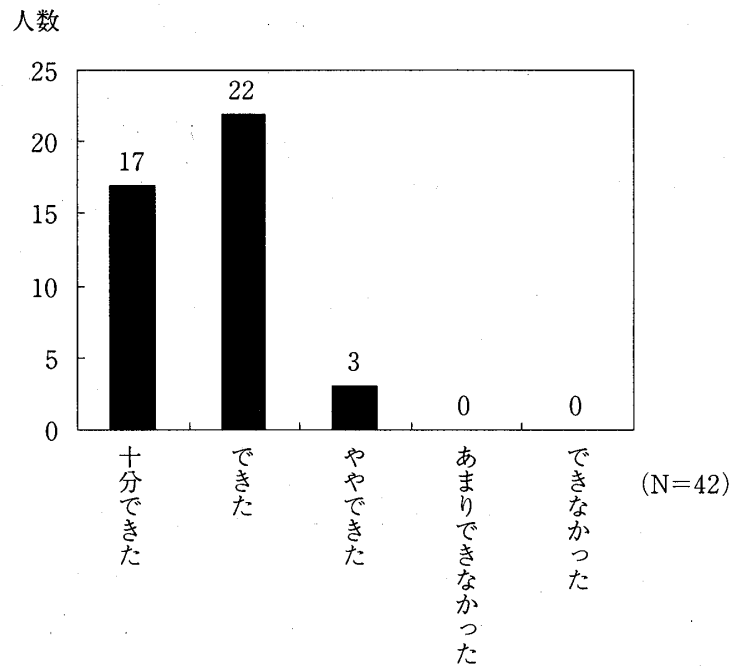


図1 段取りシートにより技術の流れやポイント整理できたか

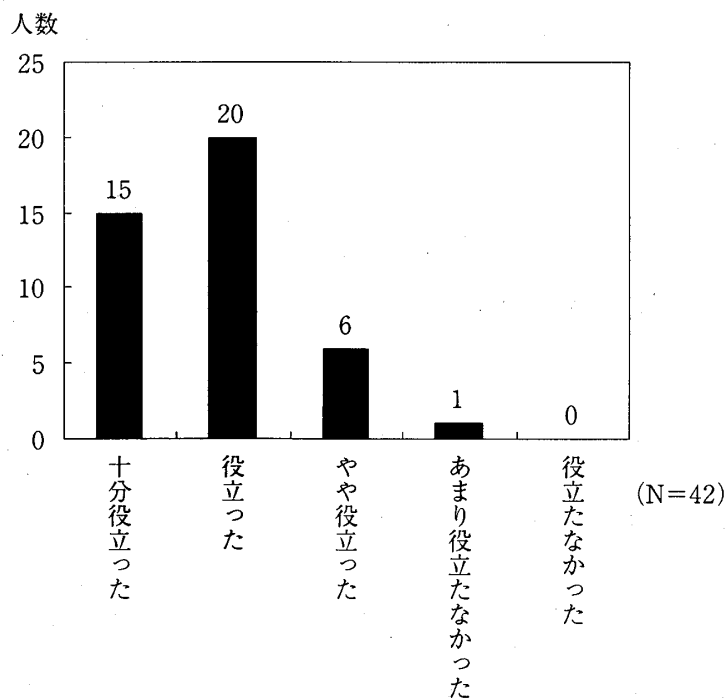


図2 デモンストレーション時の段取りシートが技術練習に役立ったか

(57.1%)であった。「やや感じた」は15名(35.7%)であり、「あまり感じない」は3名(7.1%)という結果であった。「感じない」「全く感じない」という回答はみられなかった。

さらに、どのような違いを感じたのか、6段階評定尺度別に、記述により回答を求めた内容をカード化した結果は、表1の通りであった。

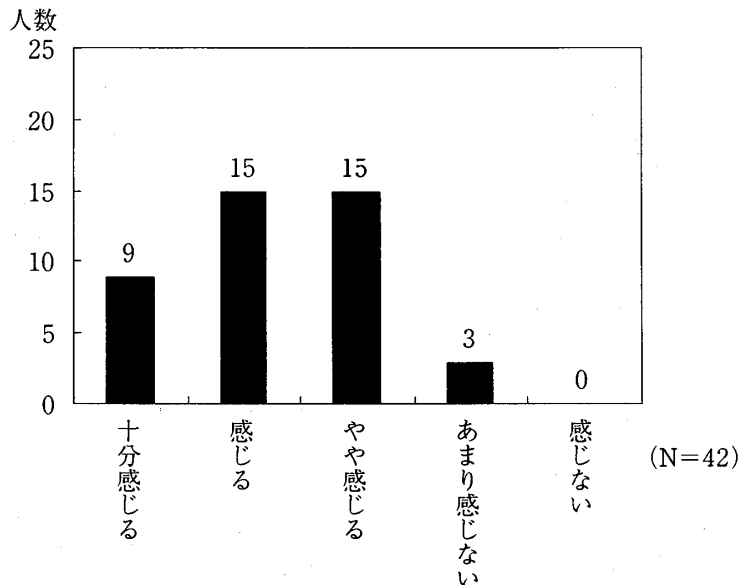


図3 デモンストレーション時と洗髪技術チェック後の段取りシートに違いを感じたか

表1 洗髪技術演習前後に記載した「段取りシート」に違いを感じたと回答した39名の尺度別理由のカード化の分析結果

n=89枚 単位：枚

カテゴリ	サブカテゴリ	尺度別回答数			合計
		十分感じた 9名	感じた 15名	やや感じた 15名	
Ⅰ. 洗髪技術に関する気づき	1. 後は技術の根拠が考えられていた	5	8	9	22
	2. 後のシートで気づいた洗髪技術のポイント	7	1	11	19
	3. 患者の安全・安楽を考えるようになった	2	2	3	7
	4. 技術の方法が患者の立場に立って考えられた	3	3	0	6
Ⅱ. 段取りシートに関する気づき	1. 段取りシートの書き方などに気づいた内容	5	14	6	25
	2. 技術練習に段取りシートは役立った	4	1	0	5
	3. 段取りシートの記載はたいへんであった	0	4	1	5
合計		26	33	30	89

「十分感じた」から「やや感じた」と回答した者について、その違いに関して、記述した内容をカード化した結果、カード総数は89枚となった。そのうち、「十分に感じた」と回答した者のカード枚数は、26枚、「感じた」は33枚、「やや感じた」は30枚であった。「あまり感じない」は4枚であった。

次に、カード内容を類似別に分類した結果は、2カテゴリ、7サブカテゴリであった。第Ⅰカテゴリとして、「洗髪技術に関する気づき」が54枚（60.7%）であり、サブカテゴリとして、「1. 洗髪技術の根拠が考えられた」22枚（24.7%）と最も多く、次いで、「2. 洗髪技術のポイントの気づき」19枚（21.3%）であった。続いて、「3. 患者の安全・安楽を考えられていた」7枚（7.9%）、「4. 洗髪技術の方法が相手の立場に立って考えられていた」6枚（6.7%）であった。

第Ⅱカテゴリの「段取りシート記入に関する意見」は35枚(39.3%)であり、サブカテゴリとして、「1. 段取りシートの書き方に関する気づき」25枚(28.1%)と最も多く、なかでも「感じた」と回答した者は14枚と他の回答した者より多かった。「2. 技術練習には段取りシートは役にたった」5枚(5.6%)であった。また、このサブカテゴリは「やや感じた」と回答した者にはみられなかった。さらに、「3. 段取りシートの記載はたいへんであった」5枚(5.6%)みられたが、このサブカテゴリは、段取りシートの違いを「感じた」「やや感じた」と回答した者のみにみられた。

次に、学生が記述した具体的な内容をみるために、各回答別ではなく一括して、カテゴリ、サブカテゴリの内容をあらわしたものを表2に示した。

第Ⅰカテゴリ「洗髪技術に関する気づき」の第1サブカテゴリ「洗髪技術の根拠が考えられた」の学生の記述内容をみると、「前は、やり方、順番だけをメモしてあったが、後は、根拠が書いてある』『後に書いたシートはその行動の理由を踏まえて書くことができた』『注意点や根拠がわかるようになった』『後は、なぜこのようなやり方なのかと深く考えるようになった』などであった。次に、第2サブカテゴリ「洗髪技術のポイントへの気づき」では、「頭髪の洗い方が、あとの段取りシートのほうがポイントをつかみ詳しく書いていた』『ケリーパットの金具があたらないようにすること』『ケリーパットの水の流れを出すイメージとお湯を流すタイミングを考える』『耳に水が入らないよう親指で耳を押さえるやり方(手による壁の作り方)』などであった。第3サブカテゴリ「患者の安全・安楽を考えられるようになった」では、「後は患者さんの安全・安楽を考え行動(洗髪の技術)を行なっている』『患者さんにとって安楽なように作業順番が変わっていったところ』などであった。第4サブカテゴリ「技術の方法が患者の立場に立って考えられた」では、「技術テスト後の段取りシートは、実際に自分が練習してみてわかったことが、患者さんのことを考えながら書くことができた』『患者さんに不快を与えないということ』『後のシートでは、患者の気持ちも分かった』などであった。

次に、第Ⅱカテゴリ「段取りシート記入に関する意見」の第1サブカテゴリ「段取りシートの書き方に関する気づき」の学生の記述内容をみると、「前回書いたものは順番しか書いてなかった』『後のシートのほうがスムーズに書けた』『最初に書いたものは手順がばらばらになっていた』『前のシートより、後のシートの方が細かく書いてあると思う』などであった。第2サブカテゴリ「技術練習に段取りシートは役立った」では、「洗髪の流れがきちんと分かるようになった』『チェックリストだけだとその項目しか見えず、自分の頭でしっかり考えられないので、段取りシートはこれからも使用したいと思った』『すごく頭に残りやすいと思った』『段取りシートは大いに役立ったと思う』などであった。第3サブカテゴリ「段取りシートの記載はたいへんであった」では、「前は、書くのでいっぱいになってしまい、デモをよく見られなかった』『字が雑になる』『デモのときは時間がなくて書けなかった』などであった。

表2 洗髪技術演習前後に作成した段取りシートに違いを感じたと回答した学生の記述内容の分析結果

カード総数89枚=100% 単位：枚

前後の違いに関する内容の代表カード	サブカテゴリ	カテゴリ
<ul style="list-style-type: none"> ・前は、やり方、順番だけをメモしてあったが、後は、根拠が書いてある。 ・後に書いたシートはその行動の理由を踏まえて書くことができた。 ・注意点や根拠がわかるようになった。 ・後は、「なぜこのようなやり方なのか」深く考えるようになった。 ・前のやり方は、その洗髪のやり方や手順を覚えるだけで、いっぱいいっぱいだったので、一つ一つの動作の根拠が分からなかった。 ・後の段取りシートは、細かなところまでポイントがつかめたから。 ・洗髪をした時の作業の意味がわかった。 ・前のより後に書いたほうがポイントを書き、それがどのような効果があるか書かれていた。 	1. 洗髪技術の根拠が考えられた。22 (24.7%)	I. 洗髪技術に関する気づき 54 (60.7%)
<ul style="list-style-type: none"> ・頭髮の洗い方が、あとの段取りシートのほうがポイントをつかみ詳しく書いていた。 ・ケリーパットの金具があたらないようにする。 ・ケリーパッドを最後に入れたほうがよいと思った。 ・ケリーパットの水の流れを出すイメージとタイミング ・後頭部を洗う時、右側を向いてもらう洗い方 ・タオルを巻いて、ケリーパッドをはずす手順 ・耳に水が入らないよう親指で耳を押さえるやり方 (手による壁の作り方) 	2. 洗髪技術のポイントへの気づき。19 (21.3%)	
<ul style="list-style-type: none"> ・後は患者さんの安全・安楽を考え行動 (洗髪の技術) を行なっている。 ・患者さんにとって安楽なように作業順番が変わっていったところ。 ・いかに安全で安楽が大切かを考えるようになった。 ・患者さんの安全・安楽を考えた洗髪が大切であるとわかった。 	3. 患者の安全・安楽を考えられた。7 (7.9%)	
<ul style="list-style-type: none"> ・技術テスト後の段取りシートは、実際に自分が練習してみてわかったことが、患者さんのことを考えながら書くことができた。 ・患者さんに不快を与えないということ。 ・後のシートでは、患者の気持ちも分かった。 ・後の段取りシートは、常に患者さんの気持ちを考えて、自分なりの配慮の気持ちがみられたかなと思った。 	4. 洗髪技術の方法が患者の立場に立って考えられた。 6 (6.7%)	
<ul style="list-style-type: none"> ・前回書いたものは順番しか書いていなかった。 ・後のシートのほうがスムーズに書けた。 ・最初に書いたものは手順がばらばらになっていた。 ・後は、自分なりにまとめて書くことができた。 ・前に書いたシートはただ単に手順、流れみたいなものしか、書くことができなかった。 ・前のシートより、後のシートの方が細かく書いてあると思う。 	1. 段取りシートの書き方に関する気づき。 25 (28.1%)	II. 段取りシート記入に関する意見 35 (39.3%)
<ul style="list-style-type: none"> ・洗髪の流れがきちんと分かるようになった。 ・チェックリストだけだとその項目しか見えず、自分の頭でしっかり考えられないので、段取りシートはこれからも使用したいと思った。 ・すごく頭に残りやすいと思った。 ・段取りシートは大いに役立ったと思う。 	2. 技術練習に段取りシートは役に立った。 5 (5.6%)	
<ul style="list-style-type: none"> ・前は、書くのでいっぱいになってしまい、デモをよく見られなかった。 ・字が雑になる。 ・デモのときは時間がなくて書けなかった。 	3. 段取りシートの記載はたいへんであった。5 (5.6%)	

洗髪技術演習前・後の段取りシートに違いを「あまり感じない」と回答した学生が記述した内容は、『前回のシートと今回のシートの内容があまり変わらないから』『大体の要点について、書いてあった』『基本的には段取りシートを見ながら練習を行なっていたので特別感じなかった』などであった。

VI. 考察

1. 洗髪技術習得過程において、段取りシートの活用から学生が捉えたもの

1) 洗髪技術習得過程における段取りシートの捉え方とその意味

洗髪技術演習前・後に、段取りシートを記入したことで、洗髪技術の流れやポイントを整理することができたと回答した学生は、ほぼ全員の学生であった。このことは、洗髪技術のデモンストレーション時、段取りシートを書くことによって、洗髪の技術練習に活かしたといえる。そして、洗髪技術のチェック後に、再び段取りシートを記入したことにより、流れやポイントを整理できたと、学生が捉えることができたといえる。このことは従来のように、教員による技術のデモンストレーションの見学時、学生はメモも取らずに見学していた状況ではなく、洗髪技術の流れを、段取りシートに、何を何のために行なうのか、手順や要点を書き込むことによって、斉藤がいうように、「物事を見るとき、「段取りを見る」という視点を導入すれば、見えてくるものがたくさんある」⁶⁾と一致した内容となったといえる。そして、洗髪技術の流れやポイントをつかめたと認識できたことは、手順だけではなく、今後、看護技術を学ぶ上で、その技術の意味や根拠を考えるためのきっかけになる重要な学びと考える。

2) 洗髪の技術練習に段取りシートが役立つと捉えられたこととその意味

次に、洗髪技術のデモンストレーション時に、学生が記入した段取りシートは、洗髪技術練習に活かされたかという質問に対して、ほぼ全員が、段取りシートの記入は、洗髪技術の練習に役立つと回答していることが明らかになった。

看護の初学者である学生にとって、看護技術は、日常行動パターンとは異なり、患者のための援助行為であり、それは、学生にとって、新しい行動を身につけていく困難性があるといえる。このような状況を踏まえ、矢口は、「看護基礎教育の中で、学生は看護職として、望ましい行動のあり方に向かって、自らの行動を意識して、相手の状況に適応した行動を組み立て、作り出していく学習が必要となる。それは単に形だけまねてできるものではない。看護の専門家としての行動の仕方、行動形成の学び方を学ぶことになる」⁷⁾と述べている。このためにも、看護の技術教育は、看護の専門家になるための基本の教育がなされなければならないと考える。今回、その手立ての一つとして、洗髪技術の練習の際に、段取りシートを活用したことで、技術練習において、ただ、手順どおり実施するというのではなく、次に何をどのようにやるのが、技術をスムーズに患者に提供できるのか、洗髪技術の流れやポイントをつかみながら、効率的な段取りをとる

という意識で、段取りシートを、技術練習に役立てていったと伺える。

2. 洗髪技術習得過程における段取りシートの意味するもの

洗髪前・後の段取りシートを比較して違いを感じるかという質問に対して、図3に示したように、「十分感じた」「感じた」と回答した者は、24名（57.1%）であった。「やや感じた」15名（35.7%）を含めると、約93%の学生が違いを感じたと回答していることが明らかになった。

記述内容の分析結果から、「洗髪技術に関する気づき」と「段取りシートそのものに対する気づき」の2カテゴリに分類できた。このことから、学生は、段取りシートを技術練習に活用したことにより、洗髪技術に関する内容と段取りシートに関する内容を捉えていることが明らかになった。

1) 看護技術に関する気づきとその意味

(1) 「洗髪技術の根拠が考えられた」と捉えられていたことの意味

「洗髪技術に関する気づき」に関する内容として、「洗髪技術の根拠が考えられた」が全体の24.7%と最も多くみられた。学生の記述内容では、『前は、やり方、順番だけをメモしてあったが、後は、根拠が書いてある』『後に書いたシートはその行動の理由を踏まえて書くことができた』『注意点や根拠がわかるようになった』『後は、なぜこのようなやり方なのかと深く考えるようになった』などであった。技術を実践する上で、根拠をもつという概念は、看護実践において、看護を科学的に実践していくための重要な要素とされ、学生のこの気づきは、看護職者になるものとしての大切な学びといえる。このことについて、斎藤⁹⁾は、「自分の仕事の中心は「段取り力」だと意識すれば、仕事の本質が見えてくる。その言葉がないため、個々の活動がばらばらに見えてしまい、何か大切なものが抜け落ちても気づかない」。さらに、「何かをやる時は、いつも「自分はどのような角度で、何に向かうのか」意識していることが大切」という視点で、技術の練習に取り組んでいく必要性を指摘している。学生にとって、技術の練習をする時には、対象のために段取りをよりよくとるという視点を持って技術練習していくことが、技術の根拠を意識できる意味で重要なことであると、これらの結果より再確認できた。

また、このことについて、阿部も、「マニュアル的もしくは過去の体験に依拠した感覚的行為のフェーズにおいては、その行為の「科学的根拠」は意識されていない。そして、科学的根拠の重要性に気づく→「気づいた」ときに「探求」は開始される⁹⁾と述べている。ことから単に、学生は手順などマニュアル的な思考で技術を練習するのではなく、科学的根拠を意識しながら技術を探究していくことが重要であると示唆を得ることができた。

(2) 「洗髪技術のポイントへの気づき」とその意味

「洗髪技術のポイントへの気づき」に関しては、全体の21.3%みられた。学生の記述内容をみると、『頭髪の洗い方が、あとの段取りシートのほうがポイントをつかみ詳しく書いていた』

『ケリーパットの水の流れを出すイメージとお湯を流すタイミングを考える』などであった。これらのことについて、「大事なのは、出会った現場を見て、経験を積み重ねることによって、自分の中にチェック項目を増やしていくことだ」¹⁰⁾と齊藤が指摘している。洗髪の技術練習を重ねることで、学生の中に技術のチェック項目として、ポイントを増やした結果ともいえる。

(3) 「患者の安全・安楽を考えられた」こととその意味

「患者の安全・安楽を考えられた」に関するものは、全体の7.9%みられていた。学生の記述内容をみると、『後は患者さんの安全・安楽を考え行動（洗髪の技術）を行なっている』『患者さんにとって安楽なように、作業順番が変わっていったところ』などであった。日本看護科学学会用語検討委員会¹¹⁾では、看護技術の修得目標について、「看護技術— nursing art とは、看護の専門知識に基づいて、対象の安全・安楽・自立を目指した、目的意識的な直接行為であり、実施者の看護観と技術の習得レベルを反映する」としている。学生が、技術習得過程において、常に対象の安全・安楽という視点を持ちながら、技術習得に努力していくことが、看護技術の修得目標に関連した気づきであり、患者の援助内容の質を高める上でも重要であると考えられる。

また、段取りシートの活用を通して、これら安全・安楽という技術のキーワードの大切さを振り返られたことは、阿部がいう「患者の反応をもとに、自分の援助を評価したり、アプローチの方法を変更したり、そして、それが、やがて援助において、安全・安楽をもたらす意図的かつ落ちついた行為が展開される」¹²⁾ということに、これら学生の気づきはつながっていくものと期待できる。

これら、学生が洗髪技術において、気づいた患者に対する技術の安全・安楽の大切さは、少数であったが、重要な気づきといえる。今後、このような気づきをたくさん得られるため、技術習得の働きかけをしていきたいと考える。

(4) 「洗髪技術の方法が相手の立場に立って考えられた」と捉えられていたこととその意味

洗髪技術の方法が相手の立場に立って考えられていた内容については、全体の6.7%であった。学生の記述内容をみると、『技術テスト後の段取りシートは、実際に自分が練習してみてもわかったことが、患者さんのことを考えながら書くことができた』『患者さんに不快を与えないということ』『後のシートでは、患者の気持ちも分かった』などであった。

看護は人間対人間の関係で成立するものであることから、患者の反応を無視した看護行為は看護ではないと考える。これらのことに関して、阿部は看護の臨床知として、「看護は、患者との関係を中心とした相互主観的行為であり、絶えず変化し続ける反省的実践の過程である。この臨床知の様相においては、学生の対象への関わりの意思が大きく影響していた」¹³⁾と述べている。患者の立場に立つという視点は、看護基礎教育において、重要な学生の学びであり、大切に育てていきたい一つと考える。

2) 段取りシートに関する気づきとその意味

「段取りシート記入に関する気づき」は、全体の39.3%を占めた。サブカテゴリとして、最も多かったものは、段取りシートの書き方に関するもので全体の28.1%であった。なかでも、洗髪前後の段取りシートに違いを、「感じた」と回答した群が最も多くみられた。学生の記述内容をみると、『後のシートのほうがスムーズに書けた』『最初に書いたものは手順がばらばらになっていた』『前のシートより、後のシートの方が細かく書いてあると思う』『前回書いたものは順番しか書いていなかった』などであった。このことは、段取りシートを記入することにより、シートの書き方の振り返りとなり、そして、それが、自分の技術の捉え方の評価にもつながる内容と考える。また、この洗髪技術演習前後の段取りシートの比較を通して、気づいたことを記述することにより、学生だけでなく、教員にとっても、学生の技術習得過程における学生の状況が可視化でき、技術指導にも活かしていけるものと考ええる。

次に、「技術練習には段取りシートは役にたった」は全体の5.6%みられた。また、このサブカテゴリは「やや感じた」と回答したものにはみられなかった。学生の記述内容をみると、「技術練習に段取りシートは役立った」では、『洗髪の流れがきちんと分かるようになった』『チェックリストだけだとその項目しか見えず、自分の頭でしっかり考えられないので、段取りシートはこれからも使用したいと思った』『すごく頭に残りやすいと思った』『段取りシートは大いに役立ったと思う』などであった。山内は、技術習得を促進し、向上するために、「途中途中で段階的な到達点を系統的に示すことは、有効な方法論であろう。最終的には到達するために、正しい道筋があり、その中でも、より有効なアプローチがあるはずである。たとえば、ある山に地図も何もなく、これから初めて登ろうとするときには、先が見えないためにどのルートをどんなペースで進んで行ったらいいものかわからないものである」¹⁴⁾と示唆している。このように、看護技術を習得していく際に、段取りシートなどのツールを使うことで、自分が、今看護技術を習得するときに何がわかり、何がわからないのかを明確にすることができ、技術習得の途中のプロセスにおいて、修正する一つの指針となることができると考える。また、このように、『段取りシートが役にたった』とか『さらに今後も使っていきたい』と考える学生もいることから、他の技術習得にも活用していくことができると考える。このことに関して、斉藤は、「このように段取りという言葉は、領域に限定されない言葉である。何かで培った段取り力は、他に移すことができる。これが非常に大きな自信になる」と述べ、一芸に精通するとその内部の段取りがわかってきて、物事がうまくいくための段取りはこういうふうにするんだと言うことが、身に染み込んでいるので、他の事にも応用できる。そして、段取り力を鍛えた経験のまったくない人は、何かに臨む時の段取りのイメージがつかめない。段取りのイメージをつかんだ上で、入っていくのとそうでないのとでは、効率に大きな差が出てしまう」¹⁵⁾と示唆していることから、今後、より活用しやすい段取りシートの工夫も課題と考える。

さらに、「段取りシートの記載はたいへんであった」は全体の5.6%みられたが、このサブカテ

ゴリは、段取りシートの違いを「感じた」「やや感じた」と回答した群のみにみられた。学生の記述内容をみると、『前は、書くのでいっぱいになってしまい、デモをよく見られなかった』『字が雑になる』『デモのときは時間がなくて書けなかった』などであった。また、洗髪演習前後の段取りシートに違いを「あまり感じない」と回答した者が3名(7.1%)みられた。学生が記述した内容は、『大体の要点について書いてあった』『基本的には段取りシートを見ながら練習を行っていたので特別感じなかった』などであった。

洗髪技術演習前に記入した段取りシートは、はじめての段取りシートの記入であり、『手順がばらばらに書いてあった』という学生の記述内容からも、デモンストレーションをみながらの記入は、洗髪技術の流れを書きとめることに、精一杯で、洗髪技術演習前・後に記入した段取りシートに対する違いにも「十分感じた」という回答はみられず、「感じた」「やや感じた」という認識の状況であった伺える。これらの点も踏まえ、今後スムーズに段取りシートを記入できる方法を検討していかなければならないと考える。

Ⅶ. 結論

看護技術修得過程に段取りシートを活用しことで、洗髪技術演習前後に記入した段取りシートから学生が捉えたものは、以下の通りであった。

1. 段取りシート記入により、技術の流れやポイントが整理できたと学生は捉えていた。
2. 段取りシート記入は、洗髪技術の練習に活かされたと学生は捉えていた。
3. 洗髪演習前後の段取りシートの違いを感じた学生は9割であった。その違いについては、「洗髪技術に関する気づき」と「段取りシートに関する気づき」の2カテゴリに分類できた。さらに、「洗髪技術に関する気づき」の内容をみると、洗髪技術に対する根拠やポイントへの気づき、技術を実施する上で、安全・安楽を考慮し、患者の立場に立って技術を提供することなど、看護を科学的に実践するための重要な気づきがみられた。

「段取りシート記入に関する意見」では、段取りシートの書き方に関するものがもっとも多く、つぎに、段取りシートは看護技術の練習に活かされた、段取りシートの記入の大変さなどであった。

4. 段取りシートの違いをあまり感じないと回答した学生も少数であるがみられた。

おわりに

今回、段取りシートの活用を試みたことから、学生が段取りシートからさまざまな学びを前向きにしていることが確認できた。看護技術の習得は学生にとって、日常生活行動とは異なるものが多く、看護技術の習得に戸惑う学生もみられるが、反対に、新しい看護技術を学ぶという喜びも感じながら、技術練習に励んでいる学生も多い。今後、これら学生の状況を大切にしながら、

学生の看護技術の習得に教員として、さらに努力していきたいと考える。

〈引用文献〉

- 1) 河合千恵子：私の技術教育論，日本看護研究学会雑誌，21 (1)， p 11-17， 1998
- 2) 斉藤孝：段取り力「うまくいく人は」はここがちがう，筑摩書房， p 32， 2003
- 3) 前掲 2) p 168
- 4) 前掲 2) p 20-25
- 5) 前掲 2) p 21
- 6) 前掲 2) p 166-171
- 7) 矢口新：探求行動力を育てる学習システム，能力開発工学センター， 1993
- 8) 前掲 2) p 162
- 9) 安部美和子，藤岡完治他：看護教育における「臨床知」の様相に関する一考察—現象学的アプローチに基づく参加観察法を通して—，教師学研究， 2 (3)， p 15-28， 2000
- 10) 前掲書 2) p 36
- 11) 日本看護科学学会 看護学学術用語検討委員会， p 9， 1995
- 12) 前掲 9)
- 13) 前掲 9)
- 14) 山内豊明：看護学起訴教育における技術教育とその保証にむけて，Quality Nursing， 7 (4)， p 20-26， 2001
- 15) 前掲書 2) p 18

〈参考文献〉

- 1) 斉藤孝：斉藤孝の相手を伸ばす！教え力，筑摩書房， 2004
- 2) 吉田喜久代：学生が主体的に学ぶ授業をするために教師は何を準備するか，看護教育， 42 (4)， p 264-269， 2001
- 3) 大森武子，矢口みどり他：行動姿勢を育てる学習の場をどう設計するか，看護教育， 39 (6)， 1998
- 4) 宜譜美子：学生の体験と学習内容をつなぐ授業構造，看護教育， 42 (4)， p 274-278， 2001
- 5) 藤本悦子：生活援助技術教育において‘ふりかえり思考’を育成する意味，Quality Nursing， 5 (7)， p 20-25， 2001
- 6) 中井孝章：教育の技術に関する現象学的考察，筑波大学教育学系， 10 (2)， p 83-99， 1986